

ことばとところ

著者	鍵主 良敬
雑誌名	真実心
号	4
ページ	136-153
発行年	1983-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000727/

ことばとところ

鍵 主 良 敬

五月といえば、この大学の名前がいみじくも意味しておりますように、光り輝く華の季節なのですけれども、私にとりましては、実は大変重苦しく、つらい記憶がございます。数年前のことではありますが、その自分の苦い経験をお話して、どれだけ親鸞聖人の出された課題にアプローチできるかはわかりませんが、皆様にとっての何かの参考になればと思いつながら、「ことばとところ」という題を思い付いたのであります。

そこで、忘れることのできない苦い経験とは何かと申しあげますと、私の授業を受けておりました大学二回生の女子学生が、この春の季節に自分の住んでおりましたマンションの十一階

ことばとこころ

から飛び降り自殺をいたしました。その頃学生部関係の仕事もしていたものですから、本当は顔を出すに忍びなかったのですが、仕事の関係上、仕方なしに弔問に伺ったのが、ちょうど五月という季節でありました。その女子学生は、自分の胸のポケットに学生証をズタズタに引き裂いて、それを身に着けただけで飛び降りたと、後でご両親から伺いました。大分冷静になってから、いろいろな事情をお聞きしたのであります。人生の春といってもいい、楽しいこと、うれしいことが満ちあふれているように見えます反面、大学へ入ったばかりの方たちには五月病というようなこともあります。皆さん方は多分そういったことはないであろうと希望いたしますし、あるいは多少悩みがあるとしても、自分の身を否定しなければならぬような、そういった悩みではなからうと思います。その方は最初、哲学を専攻したのですが、後に仏教に転科した人で、お寺ではなく、普通のサラリーマン家庭の出身でしたので、ここにお集まりの皆さん方と同じような環境に育った方であつたと思っております。

そういう方が、曲りなりにも大谷大学へ入り、この大学と同じように、浄土真宗——親鸞という方の精神を大学の根底的な支えとしている、そういう大学——でありますけれども、別に仏教を学ぼうと思って入ったのではないのに、一回生の時にふと人生の問題というか、人間の

悩みというか、そういった課題に触れて、二回生の時には仏教学をやってみたくて、転科したわけです。そのような人間の悩みを解決するものが仏陀であり、解脱であろうと考えたのでしょうか。解脱というのは、解きほぐされたということ、解放されたということ、涅槃——ニルバーナというのは、吹き消すということ、心が吸い寄せられていくような、自分が好ましいものに出会った時には、我々の心が吸い寄せられていくような愛着、あるいは憎らしいものにぶつかりと、居ても立ってもいられないような憎しみの感情、そういうような心を吹き消すものが、静かな、涅槃寂靜といわれるような満ち足りた問題の解決した状態なのであって——それを仏陀は明らかになさって我々に説き示されたから、仏教が成り立ったのだらうと、このように考えてわざわざ仏教学に転科までして、しかも私の授業をひと月あまり聞いてくれたのに、どうして彼女は早々と、こんなに素晴らしい青春というものを、なぜ自ら否定してしまったのか。そんなに彼女自身の悩みは深く、そしてその彼女自身が感じていた悩みに対して、私が関わったその仏教学というものは、そんなにも無力だったのか。歯がゆいのか、情ないのか、そういった状態で弔問の場に駆けつけたのですが、今皆さん方にお話するについて、その時のふがいない気持ちがい思い出されてならないのであります。

ことばとこころ

そして、仏教の精神、あるいは浄土真宗の精神を基盤として成り立っている大学であるのに、あまりにもだらしのない我々スタッフのことをお詫びかたがた、大事な大事なお嬢さんを亡くされたご両親を、どうやって慰めたいのだろうと、いろいろと言葉を考えながらお伺いしたのであります。亡くなる時の様子を人伝に聞いておりましたのでありますが、私自身も一応授業において関わりながら、どうすることもできなかったという、くやしき、情なさをもってお伺いしていたのです。

実は彼女が飛び降りる時に、お母さんが偶々茶の間にいまして、その茶の間の母親の側を、すうっと通り抜けて屋上へ上がって行って、そして飛び降りた。お母さんにとっては、まさか自分の娘が、日常生活で一緒に居りますから、それほど深い悩みを持っていたということも思ひも及ばない。何かガヤガヤザワザワと声がして救急車の音がするので、何の気なしに外へ出てみたところが、わが最愛の娘が血まみれになってコンクリートの庭に叩きつけられていた、ということであったようであります。母親と娘として——教師と学生という関係もある意味では密接な繋がりですが、母親と娘であれば尚更であろう——しかも、自分の側を通り抜けて、屋上へ上がって行った娘を、血を分けた母親がどうすることもできない。後で気が付いてみれ

ば、そういえばあの子は悩んでいたのかもしれないと、その節々が、多少思い出されはしたようであります。けれども、「他人の片腕を切り落とした痛さよりも、自分の小指に突き刺さったトゲの方が痛い」というように、小さな小さな何でもないそういうトゲでさえも、自分自身に突き刺さってくれば、大変痛みを感じます。しかし、他人ごとになってしまいますと、片腕を切り落としても、自分自身にとっては痛くもつらくもない。親子だとか兄弟だとか夫婦だとか恋人同士だとか、いろいろな関係はありますけれども、そこに大変情ないというか、残念だというか、冷たいというか、あるいはまた、どうしてみようもないというか、誰かの痛み、誰かの悩み、それが自分自身にとっては、まことに心許ない。週に一回の授業でさえもそれだけの悔しさを感じるのに、親子なのに、一緒に居たのに、その子の悩みをどうしてやることもできないうし、相談にのってやることもできない。しかもその娘が母親に対して、相談する気にもなれなかったというのは、これは一体どういふことなんだろうか。

これは弔問のお札に來られたお母さんの述懐として、お聞きしたことです。しかしその時のご両親は、まっ青な顔をして、涙も出さず、ただじいっと一点を見つめているだけの状態でした。お会いして、人間というものは言葉を使う動物だ、言葉がなければ、自分の意志を伝達す

ことばとこころ

ることはできない。自分の思いはすべて言葉で表現し、そしてその言葉というものは、相手に必ず伝わるのではないか。ですから、人間の特徴をいろいろな形で押さえることはできませんけれども、言葉を使う動物だということも、有力な人間を表す特色の一つとなっているはずでありますのに、私自身はいろいろとああも言おう、こうも言おうと思いつながら、そのご両親に会いました時に、一言も自分の心を語る言葉を見出すことができなかった。何も言わないわけにもいきませんので、口の中でもごもごと、何だか自分でもわかったのかどうかわからないようなことを言った、そういう状態であったのであります。その時にも悲しみなら悲しみ、つらさならつらさというものが、あまりにも本物であればあるほど、よくわかればわかるほど、その子はなぜ自分の悩みを語ってくれなかったのか、どうしてそれを私に相談してくれなかったのか、彼女はなぜ言葉を発しなかったのか、という物足りなさ、残念さというものを感ずると同時に、ある事がらが本当であればあるほど、それは言葉で表すことはできないのであって、本当に悲しい悲しみには、涙も出ないということを実感したのです。涙が出るとか、泣き声をあげるとか、言葉を発することのできるような、そういう悲しさには、ある意味で余裕がある。「こころとことば」というような題を思い付きましたのも、心の深さそのものを表し得る

ような言葉を我々は全く持つことなしに、この世に人間として投げ出されてきて生きているのであって、どうでもいいようなこと、さしさわりのないようなことは、いくらでも話し合うことはできますのに、本当に伝えなければならぬこと、どうしてもわかってほしいこと、そういったものは、そうであればあるほど言葉では表すことができないという、奇妙な関係といえますか、そういった関係に置かれているといえるのです。

皆さんも文学部の学生であり、文学は言葉の学でありますから、そういう意味において、言葉を土台にし、言葉を手がかりにしなければ、学問は成り立たない。そして、まことにその言葉こそが、文学を成り立たせる。そういう、どうしてもなければならぬ、人間そのものすら成り立たないような、そういう大事な大事なものが言葉なのに、いかにせん、その大事なものの、肝心かなめのことについては、まことに無力であるという、二律背反といえますか、そういった状態に置かれているといえるのです。多分皆さん方がなさろうとしている学問の一番の基礎になる言葉そのものが、まことに不完全なものであり、まことに歯がゆいものであり、全体的な限界といえますか、そういった枠の中においてしか機能し得ないというものである、その言葉を用いてこそ学問の最重要な課題とするのが文学部であるということを、ぜひお考えい

ことばとこころ

ただきたいと思うのであります。

ところが、そこで弔問に行ったのに慰める言葉がなかった。そしてその相手でありますご両親も涙さえ出していなかった。ただし、見れば言葉はなかったけれども、涙も流れていなかったけれども、いかに深い悲しみであるかということは、様子を見れば自らわかったということはいえます。百人一首に、

忍ぶれど色に出にけり我が恋は

ものや思ふと人の問ふらん

とありますように、どれだけ隠していても、他の人には知られたくないと思っても、自分自身の誰かを恋い焦がれるその心が切実であればあるほど、どこかにその姿というものは表れるものであります。仕事のうえでの都合というようなこともあって、私は他人の痛さを本当に自分の痛さとして感ずることができないままで、お伺いしたのではありましたが、そのご両親の姿を見ました時に、言葉は一言もありませんでしたけれども、そこにありありと感じ取られる悲しみ、痛みの深さというものは、ほんの少しながら、忘れられない印象として、感じられたことであります。そして今もお、五月になれば、あるいは偶々こういった機会を与えられる

と、周りは太陽が光り輝き、花が咲き、青葉が緑そのものにその若芽をすくすくと萌えたたせているのに、その中に生きている人間そのものの心の暗さが、周りが明るければ明るいほど、その闇の深さ、悲しみの重さ、そういったものが印象深く思い出されてならないのであります。

いよいよお葬式の読経がすみまして、棺がそのマンションから運び出されようとなりました時に、今まで涙も出さず、言葉も出さず、唯じいとうつ向いたただけでありました母親が、突如として「マコちゃん！」とその子の名を呼んだのであります。

『歎異抄』という親鸞と唯円の対話の記録の中に、「耳の底にとどまるところ、いささかこれを記す」というようにいわれております。青年期の唯円が、親鸞という方との出会いの中で、その方の語った、グサリと人間の生の問題に突き刺さってくるような、そういう思い出深い言葉、自分自身の耳の底にとどまっている言葉——あの『歎異抄』を記録したのは、老いさらばえて、耳も聞こえなくなり、ものもよく見えなくなった、そういう老年時代、七十か八十になった頃のようにありますけれども、自分自身が青年時代に親鸞との出会いの中で忘れるようとして忘れることのできない、その思い出のいくつかをちりばめながら、それを記録した

ことばとこころ

ものとして、大変有名でもあり、生きるということはいかなることかということに関心を持つ方は、多分一度は目を通されるものでありましょうから、思い出されるような対話のいくつかもおありかとも思いますが――私の場合には、今のこの経験で申しますと、その母親の「マコちゃん!」「帰って来て!」。そしてその子が多分いつも使っていた化粧水だったと思います。が、「オーデコロン! オーデコロン!」という三つの言葉、この言葉が五月という季節になって、辺りが明るく輝けば輝くほど、私自身の大変重たい言葉として、量りしれない大きな課題を問いかけてくるものであります。オーデコロンと申しましても、学生の身分で用いるものですから、そう高価なものではないのでありましょう。帰って来てという言葉自身も、我々の日常の生活経験の中でいくらでも使い、その辺に転がっているといえますか、さしたる意味もなしに用いておりますありふれた言葉であるといえるかもしれません。そして我が子の名前といっても、例えば皆さん方の名前ひとつにしましても、無意識に呼ばれていることもあるでしょう。ご自分の家から通っておられる皆さんなどは、いつもいつもお母さんに呼びかけられて、うるさくてかなわない、もう少し黙ってそっとしておいてほしい、放っておいてほしい、悩みなどはないんだ、要らんことせんでほしい、とそのような断絶といえますか、干渉された

ことを拒む気持ちもあるでしょう。人間はたくさん居るようにみえますが、それらがすべて孤独な、まことに冷めざめとした関係の中で、まさに都会のジャングルの中へ放り出された孤独な存在、それが偶々男とか女という関係で寄り集まって核家族をつくるにすぎませんから、好きで一緒になったはずなのに、まことに簡単に破れ果てていくようなことになるわけです。そういった中で、うるさく呼びかけられると、全くうるさくてかなわない、ちょっと黙っていてほしいということになる。

三つの言葉が私自身の耳の底にとどまったと申し上げましたけれども、個々の言葉そのものは、まことにどこにでも転がっているような言葉にすぎなかった。しかしその言葉に託されたものは何だったのか。私も言葉を失って何も言うことができず、沈黙するしかなかった。そしてご両親も沈黙でしかなかった。何も声にならなかった。しかしその声にならなかったものというの、唯単に声にならないままで、例えば友だちとしてその人の悲しみがわかればわかるほど、慰めようがないから、だから慰めにも行かない。放っておくということではないのである。その悲しみが本当であればあるほど、いつまでもそのままで、唯過ぎ去るというのではなくて、それは必ず何かの言葉となって表現されてくるという、そういう意味を持つのではない

ことばとこころ

いか。ああも言おう、こうも言おうというような形で計算し尽くされた言葉は、確かに上ずって、ものの表面を撫でさするものとして、大変薄っぺらなものとなる可能性はあります。しかし、本当に深い人生の事実というものが感じ取られて、そしてあまりの深さにいかなる言葉も失いながら、しかも言葉を失ったから、その中味が深ければ深いほど、それは言葉ではない、絶叫となっても、恥も外聞もなしに、そこに呻き声、絶叫として発せられてきたその言葉が、まるでその事実を、その深みをこそ表すためにこの世に存在し得たのではないかと思われるような命を持って、母親の悲しみというものをありありと表現しつつ、他人の悲しみを本当に我がこととして感ずることのできない私の心を突き刺して、多分、私自身も生涯忘れ去ることのできないような、重い重い言葉として、人間の持っている悲しさとかつらさとかいうものの重みを教えてくれたことであります。

少し自分自身の経験を語り過ぎたかもしれませんが、先程申しました「耳の底にとどまるところ、いささかこれを記す」という『歎異抄』の言葉は、例えば、第十三章の宿業の問題とも関連してまいります。ある時若き唯円に向かって、六十歳を過ぎた親鸞が「私の言うことを信ずるか、言うとおりにするか」と言われましたから、「お師匠様のおっしゃることなら、おっ

しゃるとおりにいたしましょう」とお答えしたところ、「本当にそうだな、嘘じゃないな」と念を押されたうえで、「それじゃあ人を千人殺してみろ。そうすればお前が求めている如来を信ずるというその信心がお前に与えられる。悩みの世界から解放されたい、苦しみの世界から逃れたいというお前自身の悩みは解消される。千人殺してみろ。」と、こうおっしゃった。私は親鸞という人の持っている魅力の一つとして、この対話を何かにつけて思い出すのでありますが、仮りにも数珠を手につけて、仏に仕える身が、殺せとか、聞くに耐えないようなこういった言葉を、しかも弟子に向かって言うとは甚だギョッとなるような、えげつない人ではないかと思ったこともあるのです。この対話で唯円は、「千人を殺せなどと言われますけれども、私の器量では、私の力では、一人も殺せません」と答える。その時に親鸞が言うのには「人間は人を殺そうと思わなければ殺さずにすむ、そういうものではないぞ。殺そうと思わなくても、条件を与えられれば、縁が与えられれば、何人もの人をも殺さねばならないということも起るのだ。自分の力で、自分の理性で自分自身を押さえることができて、何とかこの人生は切り抜けていけるなどと思うのは大間違いだ。我々自身がこの世に一人の人間として投げ出されて生きているこの事実の持っている重さは、いい加減な理解の仕方ではとうてい知り得ないもの

ことばとところ

だ。」と。

わが子さえも助けようと思っても助けることができないというような歯がゆさ、あるいはまた助けようとしてどころか、子供の方は放っておいてくれ、無関係だという関わり方で、唯単に好いたとか惚れたとか、都合が悪いから一緒に居るのだとか、自分の欲望を満たすために、男が必要だとか、女が必要だとか、単に雄と雌の関係のようにしてくっ付いたり離れたったりしてセックスの氾濫する状況、そんなところだけで人間関係をみていくとするならば、これはとても解決できる問題ではありません。

この間、京都大学の先生が谷大へ来られ、動物の話をしておられましたのを聞き、面白いと思ったのですが、動物の雄は決して雌を殺さない。それなのに、人間のみが雌を殺す。あるいは雌に殺される雄さえ存在する。何ということか。動物のほうがある意味でまだましだといわれているような、そういう関係。テレビや新聞の三面記事、それに週刊誌を見ますと、飽きもせず血みどろの人間関係というものが繰り返されております。それは、唯単に私とは無関係の三面記事の痛くもかゆくもない出来事ではありません。それは深い深い人間の実存を語っているものであって、親鸞が「唯円、おまえは、若さに甘えて人生を薄っぺらなところだけで見て、

人間としてここに生きているということの重さについて、いいかげんな理解の仕方をしているけれども、そんな軽々しいものとして、我々はこの世に生きているのではないぞ」ということを言っているように思えるのです。殺すとか殺さないとか、甚だ穩当を欠く、あるいは読み方を誤れば、大変いやらしい対話のようににも思われますけれども、青年唯円の胸に突き刺さって生涯忘れることのできなかった自分自身に対する問いかけとして、親鸞という方のその言葉が、重みをもって耳の底にとどまったといったしますならば、それは正に親鸞と唯円の関係という歴史の事実ではあっても、そのことの持っていた、ともすれば言葉をまことに浅薄なところで見かみることができないという問いかけは、我々に何らかの息吹きを与えてくれるのであります。何の重みも感ずることのできないような、そういうところで文学を学ぼうとする時、あるいはその言葉というものの空しさ、限界を気付かされた時には、言葉を失ったのだから、もう何の語りかけも表現をとることもやめたと投げ捨ててしまつてよいのであろうか。三帰依文のはじめにありましたように、この世に人間として生きているのだから、我々は人間の関わりの中で生きているのだから、出会いの中で生きているのだから、その出会いを成り立たせる大事な手がかりとなる言葉、言葉で言い得なければ、絶叫でもいい、うめきでもいい。それなの

ことばとこころ

に、言葉に絶望したからといって、その言葉をすべてなげやりに、どこかへ、おろそかに投げ捨ててしまっているものだろうか。目の前に悲しんでいる友だちがいるのに、苦しんでいる人がいるのに、その人に、あなたはあなた、私は私だというふうなことで少しも身近な痛みとして感じようとしなくていいのだろうか。そうではありません。そうではなしに、言葉の空しさを徹底的に知り、それが、心の深さが深いほど、言葉を絶したもののだということを身をもって知る。そしてそこで知らされた深さは、単に沈黙の中だけに終わるのではなしに、「忍ぶれど色に出にけり我が恋は云々」と、必ず何かの形となってこの世に表現をとるということなのです。そして、そのようにしてとられた表現は、どれほどありふれた言葉であっても、状況によっては何の意味も持たないような言葉であっても、まるでその言葉こそが事実の重さを語ってやまないというような響きをもって我々に何かの、ある大切な人間関係の、宝物のような息吹きを伝えてくれるのです。

親鸞という方が現代もお我々に、ある種の感銘深い言葉を遺された方として魅力を感じさせるのは、いかなる言葉で表そうとしても表しえない、その深い心の確かさを、身をもって自覚しながら、単なる沈黙を超えて、あくまでも言葉として、何でもないいくらかでもその辺に転

がっている言葉として、その言葉に託して自らの心を語ってやまなかった方であるからです。親鸞という方の魅力は、彼が偉かったということや素晴らしかったということよりも、『歎異抄』の第二章に記録されていますように、命がけでこの世を生きるたくましい力の支え、それを求めて来た関東からの求道者たちに対して「唯念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」と言い、「何かほかにあるというなら、比叡山へ行って、聞いたらいいじゃないか、奈良へ行って聞いたらいいじゃないか、大先生方がたくさんいらっしゃるじゃないか。私は唯、念仏して、その深い深い心の言葉である念仏という、その言葉に触れて法然という方の教えの持っている確かさに、うなずかざるを得なかったただけだ。」というそのような言葉を絶した「心の言葉」となって働く心の深さにあるでしょう。そのような関係が了解できないならば、我々は折角この世に一人の人間として命を賜りながら、どうでもいいような雑談の世界だけにしか生きることではできず、本当に深い命の言葉の持っている大切な意味を見失った、まことに浅薄なまことに安っぽい人生を送ることしかできないのではないかと思うのです。その我々自身の浅薄さに気付いて、言葉の持っている限界と同時に、その限界から甦ってきた言葉の命に、心の言葉の命に、もし多少とも心を向

ことばとこころ

けることができるならば、我々の用いる言葉は、いかにもその辺にありふれた言葉ではあります。そこに、言うにいけない深い心を託すことも可能ではないかと思うのです。そういう言葉を目指さなければ、文学も成り立たず、大学も成り立たず、我々の人生もまた空しく過ぎてしまうということがあり得るのではないのでしょうか。ご命日を記念しての宗教講演ということで、「ことばとこころ」という題をお出しいたしました。皆様方に光の華という大学へご自分の学びの場を定められ、その文学部に、ご自分の人生の一コマを託したのであるから、ここで親鸞という人の目指した「言葉の心」、「ことばとこころ」と申しましたが、「言葉の心」と実はいいなかったような、そういった言葉こそ文学の根底として、皆様方の学問の方向を見定めていただきたいことだとお願いしまして、私の不十分な話を終わらせていただきたいと思います。ご静聴有難うございました。

——一九八二・五・二七——